

令和2年度 第1回江戸川区熟年しあわせ計画及び介護保険事業計画検討委員会

● 議 事 要 旨 ●

開催日時：令和2年7月17日（金） 午後7時～午後8時50分

開催場所：グリーンパレス 孔雀1・孔雀2

出欠席

| 所属等 | 氏名 | 出欠 |
|-------------------------|--------|----|
| 神奈川県立保健福祉大学 | ○太田 貞司 | 出席 |
| ダイヤ高齢社会研究財団 | 澤岡 詩野 | 出席 |
| 江戸川区医師会 | ◎小川 勝 | 出席 |
| 江戸川区医師会 | ○浅岡 善雄 | 欠席 |
| 江戸川区歯科医師会 | 金沢 紘史 | 出席 |
| 江戸川区薬剤師会 | 篠原 昭典 | 出席 |
| 東京都医療社会事業協会 | 藤井かおる | 出席 |
| 江戸川区訪問看護 ステーション連絡会 | 上村 和子 | 出席 |
| 江戸川区熟年者福祉施設 連絡会 | 林 義人 | 出席 |
| NPO法人江戸川区 ケアマネジャー協会 | 三田 友和 | 出席 |
| 江戸川区訪問介護事業者 連絡会 | 江面 秀樹 | 出席 |
| 江戸川区地域密着型 サービス事業者連絡会 | 梅澤宗一郎 | 出席 |
| 熟年相談室 (地域包括支援センター) | 館山 幸子 | 出席 |

| 所属等 | 氏名 | 出欠 |
|-------------------------|-------|----|
| 江戸川区生活支援協議会 | 大越利依子 | 出席 |
| 江戸川区民生・児童委員協議会 | 山口 昌一 | 出席 |
| 江戸川区社会福祉協議会 | 山崎 実 | 出席 |
| 公 募 | 寺本 孝行 | 出席 |
| 公 募 | 片岡 英枝 | 欠席 |
| 公 募 | 菊地 智恵 | 出席 |
| 公 募 | 池山 恭子 | 出席 |
| 江戸川区連合町会連絡協議会 | 中川 泰一 | 出席 |
| 江戸川区くすのきクラブ連合会 | 村田 清治 | 出席 |
| 江戸川区ファミリーヘルス 推進員会協議会 | 石井 恵子 | 出席 |
| 江戸川区議会議員 | 白井正三郎 | 出席 |
| 江戸川区議会議員 | 佐々木勇一 | 出席 |
| 江戸川区副区長 | 山本 敏彦 | 出席 |

◎委員長 ○副委員長

1. 開会
2. 区長あいさつ
3. 委員長あいさつ
4. 交代委員の紹介
5. 議事

委員長 新型コロナウイルス感染症の最近の動きについて、事務局からの説明をお願いする。

事務局 机上配布資料「介護事業所における新型コロナウイルス感染症対策連携会議について（報告）」について説明。

(1) 第8期計画の方向性と検討委員会スケジュールについて

委員長 それでは議事の(1)第8期計画の方向性と検討委員会のスケジュールについて事務局からの説明をお願いします。

事務局 資料2、3について説明

(2) 生きがい施策の推進について(介護予防・健康づくり施策の充実・推進)

委員長 続けて議事の(2)生きがい施策の推進について、事務局からの説明をお願いします。

事務局 資料4～8について説明

(3) 地域共生社会の実現に向けた取組の推進について

委員長 続けて議事の(3)地域共生社会の実現に向けた取組の推進について、事務局からの説明をお願いします。

事務局 資料9、10について説明

委員長 今までの説明について、お一人ずつ、ご意見をいただきたい。

委員 何を生きがいとするか。自立感、自分で生きているという感覚を持つということ。クラブ活動を通じて、人の世話をするとか、お金を集めるとか、そうした活動を通じて他人の役に立っているという役立ち感を持つ。地域社会とのつながりを持つことができれば、自分が今日はいいい日であったというような実感を持てるのではないかと。そうしたことが、自分らしく暮らすということにつながるのだろう。

老人福祉法には、自身の貴重な経験を社会に生かすことが熟年者の義務である旨が規定されている。そういう意識を熟年者が少しでも持ち、健康寿命を長くしていけたら、介護保険制度の目的にかなっていくものと考えている。

委員 なごみの家は、非常に地域に溶け込んでいると感じる。小さな子供から熟年者が一緒になって活動をするということは非常によいことである。基礎調査報告書では、約半分ぐらいの方がなごみの家を知らないという結果であった。なごみの家の周知を更に徹底し、より多くの区民に利用いただければ、更にすばらしい活動ができるのではないかと。

委員

フレイル予防と地域ミニデイの活動をしながら、近隣の年配の方たちへの気配りもしている。これからも地域と一緒に頑張っていきたいと思っている。

委員

通いの場などの地域活動を始めるには、初めは参加者が少なかったとしても、とにかく形にして始めることが重要である。大事なことは、地域の人からこういうことをやりたいとの要望があがってきたときに、それをどう具体化するかという点である。具体化する時には私どもの社会福祉法人も係わるが、なるべく早く中心になる人を見つけ、その人に任せて、あくまでもサポートに徹する。そういう体制をとることが肝要である。

コロナの影響により中止していた活動を再開した際、そこに参加していたボランティアの方から、「これだけ休んでみたら、お世話することが私の生きがいなのだということに気がついた。週1回か2回出るだけでも、何か私が地域のお役に立っているということが実感できた。」という旨のお話をいただいた。地域活動は、そこに参加する側のみならず、運営する側にも生きがいを与えているということが実感できた。

委員

コロナの影響で、ストレスの大きい家庭も多々あるかと思うが、熟年者が家族の若い方の文化に対して少し興味を持ってきたという面もあるようだ。多様化するニーズという点で、今までなかなか通いの場等にご参加いただけなかった熟年者が、若い方とYouTubeでの体操などを見て一緒に運動しているといった家庭もあった。

これまで私たちは、熟年者に対し、外に出そうとか、通いの場等に出ていただくと思ってアプローチしてきたが、別の形のアプローチがあるのではないかと気づいた。今後、今まで掘り起こしができていなかった方たちに対する新たなアイデアを検討していきたい。

委員

普段、介護が必要な方に対し、ボランティアベースで、通院介助や掃除などの生活支援をしている。コロナの影響により、ほとんどお手伝いができない状況であるが、働き方も変わり、普段は家にいない若い家族の方が家庭内の必要なことを少しできるようになってきている。これからの介護のあり方を考え直し、制度の再構築をしていく非常にいい機会ではないだろうか。

また、これから新しい働き方・あり方として、基本的には元気な熟年者がお

手伝いを必要としている熟年者を少しでも支えていくという形を考えていかないと、少子高齢化が進んでいくこの先の社会には対応できなくなるだろう。

委員

なごみの家の機能の大きなところは、顔の見える関係性をつくっていくということではないか。江戸川区は、顔の見える関係性ができているのだが、これは昭和40年代からのまちづくり、区民全員がまちづくりをしてきたという歴史の中で育まれたものである。これからも、多くの区民がなごみの家を利用することで、新たな関係性をつくっていけるのではないかと思っている。

委員

コロナの影響がある中で、今できる活動として、自分が担当している70歳以上の熟年者の世帯の郵便受けに、「何かあったら電話してください。」という趣旨のパンフレットを自分で作って投函してきた。それに対しては、何件か反応があった。

また、なごみの家の職員の対応について疑問に思う出来事があった。福祉にかかわる人ならば、相手の状況に対する配慮が必要と思う。

委員

地域活動に参加しない人に対するアプローチについて、江戸川区は70万の人口なので多過ぎると考えている。なぜ地域活動に参加できない、したくないと考えるのか、その原因が細かく見えてないのだろうと感じた。そこで、もう少し活動の中にブロック分けをする。つまり例えば小松川、平井、葛西というふうに地域柄もあり、地域活動に出てこない人をそうした場に出すためには、地域別に細かい分析作業が必要ではないか。

私は、これからは人に優しいまちづくり、それとお互いに違いを認め合う地域、そこを掘り下げていけば、地域活動に参加しない人たちに対する有効なアプローチができるのではないかなと思っている。

委員

生きがい施策という点で、介護予防教室では、数年前より参加者の方の要求がはっきりとしてきている。効果があるものや楽しいと感じられるものに人が集まってくるということがはっきりしてきた。具体的にいうと、認知症、運動、鬱予防といったテーマへの関心が高いようだ。一方、閉じこもりとか口腔ケアとか、こうした分野は声を掛けても人が集まりにくい。私たちは、周知の方法が課題であると思っている。回覧板や区の広報への掲載のほか、相談窓口に来た方への勧誘もしているが、新しい方をなかなか誘えていないという点も課題である。

あと、地域住民が主体となった地域づくりという点に関して、今年の3月に、住民主体の通いの場を一覧にし、区の介護保険課でまとめていただいた。熟年相談室は、そういったところにも後方支援をしている。先ほど、地域づくりを進める活動への運営者等としての参加は遠慮がちという統計が話題にあがったが、例えば興味はあるが負担の大きさを心配する人に対し、熟年相談室やなごみの家、健康サポートセンターなどが協力するので一緒にやってみませんかというアプローチも必要ではないかと感じた。

委員

まず、生きがい施策の推進という点でいうと、地域活動に参加する人たちが少なくなってきたといった話があるが、そもそも地域参加は高齢になってからという意識自体を検討する機会が必要なのではないかと考えている。例えば学生、子供の教育の一環として地域に関わってもらうような施策、更には地域の企業などが、こうした福祉施策に入っていくような視点も必要なのではないだろうか。

さらに、住民主体となった地域づくりという点で、江戸川区はボランティア活動が盛んであると感じるが、もったいないと思うのは、高齢者は高齢者のサポート事業であったり、障害者は障害者、そして子供は子供といったように、縦割りでボランティアが動いていると感じる。ボランティアが一つのプラットフォームでいろいろな施策に関わっていける、そういう窓口やプラットフォームができてくると非常に活動の幅が広がるのではないかと。

その中で、地域づくりを進める活動への企画、運営者として参加意向のある区民を取り込んでいくためのサポート体制を整えることも、非常に重要なのではないかと感じた。

委員

私たちがヘルパーとして利用者のお宅に訪問したときに、多くの方が、今週人と話したのはヘルパーが初めてだとか、うれしそうにいろいろな話をされたりする。しかし、ヘルパーができることは介護保険制度で縛られるので、そういう人たちの困りごとに対して何かアドバイスをしていくとか、介護保険ではできない、ヘルパーにはできないことを地域包括支援センター、又はなごみの家につなげていくということができないのではないかと考えた。ヘルパーもどこに相談をしたらいいのか、どこまでそういうことに関わっていいのかというのが分からないことも多々あるので、何か仕組みのようなことにしていただけ

ばすごく動きやすくなる。

委員

いろいろな課題を解決していくためにケアプランというものを作成しているが、その中で、「その人らしく」というところを考えながら、課題解決に取り組んでいる。今回も論点の中に生きがいつくりとあるが、あまりハードルが高くないものでも何か自分らしい役割を持つことが必要だと思う。

私たちケアマネジャーもコロナの中で、直接訪問するのを避け、電話等で対応をしたケースが多くあった。6月頃から二、三箇月ぶりに訪問を再開したが、電話で話すより、雰囲気も話の弾み方も全然違って、やはり月に1回ないしそれ以上は直接お顔を見ることはとても大事だなと改めて感じた。なので、社会参加については、まず挨拶だけなどできることから始め、ハードルを下げるのが非常に大事だと思う。

今家族の方も大変だと思うが、自宅にいる時間が長くなったり、若い方でこういったお仕事に興味を持っているが何をしたらいいかわからない方たちに対し、SNSを使いながら促したり、更に、熟年者の方々にもSNSの利用を促していけるといいと思う。

委員

2点お話しする。1点は、高齢者の健康状態について。このコロナ禍の中、外出や行動の機会を失い、健康状態が非常に落ちてきている方が多いことを実感している。今後、我々が今までよしとしてきた大きな声を出して近くで一緒に体操することや、体を密着し触れ合うことが今は否定されている中、新しい生活様式の中でいかにフレイル予防をしていくのかというのは一つの課題である。

2点は、地域共生社会について。江戸川区の特徴として町会、自治会等の活動が非常に活発ですばらしいなと思っているが、町会長さんを含め、地域を支えている担い手の皆さんが高齢化してきているということが一つの課題として話題となっている。10年後、20年後を見据えた地域を支える担い手の育成というのは非常に大切だと考えており、高校生、中学生、小学生に対しての福祉教育や高齢者との関わり、認知症について理解するような機会を、高齢者が一緒に参加することにより、子供たちの教育と高齢者の生きがい、それから地域の担い手をつくるという形につなげられるのではないだろうか。

委員

訪問看護の利用者さんの健康管理について質問されるが、ご家族から自分の病状のことや健康についての質問を受けることも多い。また、近所の方についての質問も結構ある。そういう中で、何か分かりやすいチラシ等あれば、その場でお渡しでき、協力できるのかなと思う。

あと、自分のことになるが、定年後、どのように地域で暮らしていくか模索中である。くすのきカルチャー教室の今後の課題で年齢制限の撤廃や夜間教室の実施があったが、少し緩い感じで気楽に参加でき、地域のことを少しずつ理解し、参加できるような環境を整えてもらえると大変ありがたい。

委員

病院は入院前と退院後、それから外来、通院中の方について様々なことで地域の皆さんのお力を借りている。コロナの影響も確かにあるが、老老介護、認知介護が増えている。家族がいてもなかなか出てきてもらえないというときに、熟年相談室の職員に訪問してもらったり、ケアマネジャーをすぐに決めてもらったり、訪問看護に週に何回も入ってもらうことが解決につながっている。それは普段から顔の見える関係がいろいろな病院や地域でできているということが一番の理由なのではないか。支援を必要と感じていない人、拒む人への支援というところで、病院への入院等をきっかけに、地域の方と一緒に何とか支援を受け入れてもらうというところにつながられるのかなと考えている。

委員

この頃オンライン診療やオンライン服薬指導等が増えてきている。先ほど他の委員がお話していたように、お年寄りでもスマートフォンを持っている方は多く、ビデオ通話ができる方もいる。緊急通報システム等は利用者さんが望んでいる会話ではなく、できれば使いやすい、常に双方向通信ができるようなシステムができないかなと思い、メーカーと話をしている。縫いぐるみでお年寄りが元気になったというのを聞いたことがあったため、それに何かIoTやSNSなどの仕組みを合わせられたら、患者さんに寄り添った形の会話ができるのかなと思いながら動いている。

委員

身体機能の低下というのは、口腔機能の低下が先に現れるというような文献があったり、最近ではメディアでも広報されている。具体的には、友人と食事ができにくくなり回数が控えられるとか、あるいは低体重になって筋力が落ち、口腔機能が低下することによってそしゃく嚥下がしにくくなり、結局、筋力がつかない低体重なので外出も控えてしまうとか、その辺が外に出にくくなるこ

とにつながる。私たちはそういうものを早めに気づかせ、またその対策を取っていくという形で、歯周病や虫歯、口腔機能の維持あるいは増進ということに力を入れており、区との協働でいろんな健診を行っている。地域社会に関しての参画について、微力ではあるが、口腔機能の維持増進というベースから何かしら貢献ができればいいと思っている。

委員

生きがい施策について、調査の中でいずれも参加したくないという方が50%ぐらいいるということだが、調査は65歳以上の方が対象なため、お勤めをされていたり、人付き合いや人間関係がまだ煩わしいという方もたくさんいると思う。そういった中で、先ほど人口推計の話もあったが、独り暮らしの高齢者や外国の方々が非常に多くなっていくことを考えると、少しでも周りの方々とのご縁をつくっていただければと思う。これからますますそういったものが大切になってくる中で、ほんの少しの関わりでも大事にしながら、地域共生社会をつくっていければと考えている。

委員

地域共生社会をつくっていくことについては、支え合い、助け合い、つながり合いという「あい」のある江戸川区にしていきたいと思っている。そのためには、シルバーの方々がプラチナに輝くように、その世代の方々がどのようにして地域貢献に参加していただくか、あと外に出ていきたくないというような方については、スマホ等ICTの活用によりいろいろなつながりができるのではないだろうか。そのつながり、帰属感、まちごと家族というような、そういった取組を皆さんと共に進めていければと思っている。

委員

今日の論点について、1つは地域貢献にある生きがいという点で、柔らかな就労支援という視点が必要ではないかということ。基礎調査報告書の第二号被保険者調査で、会、グループ等への参加は、収入のある仕事が65.2%、今後充実すべき熟年者施策は、熟年者の就労や社会参加の支援が55.6%で2番目となっている。更に、熟年者調査の地域の支え手としてできることでは、施設で話し相手や行事の手伝いをする、ひとり暮らしなどの熟年者を訪問・見守るといったのが高くなっている。そのため就労とこのような地域の支え手としてできることをつなげていければいいと思っており、熟年者のこのような活動を有償ボランティアやNPO法人にしたり、就労につなげる、生きがい就労施策というのを考えたらどうか。

もう1つは、これから多様な生きがい団体というのが出てくると思うので、これを支援する事務局的功能を持つ組織が必要と思う。

それから、なごみの家について、基礎調査報告書を読んで認知度が非常に低くて驚いた。機能の一つに何でも相談があるが、この相談機能を強化して、それが必要性につながり、認知が広がっていくのではないだろうか。

委員

皆さんのお話を伺って感じたことなどを少し整理したい。まず、参加しない人に対するアプローチについて、皆さんのお話の中にも何点か出ていたが、参加して何だろうということをもう一度問い直す時期が来ているのかなと思う。既存の団体や活動の場に参加しないということで問題だと話している時代ではなく、多様性の中で、どんな参加の形があるのだろうか、そういったことをもう一度地域に目を向けていく必要があるのではないだろうか。今、東京都の通いの場の定義づけをする場に委員として関わっているが、そこで議論されているのは、いわゆる地域のサロンだけではなく、駅前のカフェに来ている常連さんが顔見知りや挨拶したり、店員さんと会話をしていることが意外に見守り、支え合いになっているということ。そういった緩やかな通いの場、緩やかな参加をしっかりと捉まえ、どう支援に結びつけていくのかという視点を持っていく必要があるのではないだろうか。

次に、参加については、今のシニアの方、団塊世代の方よりも若い方は、かなりの割合でSNSやインターネットを活用している。今回、地域の居場所、様々な場がストップしている中で、オンラインでもつなげることが必要だということで、支援をいろいろさせていただいた。その中で、今まで参加してこなかった人たちがオンラインの場には参加してきている。ある意味少し緩やかな参加ができるのかなということで、こういった場もしっかりと考えていく必要がある。

それからもう1点、支援が必要と感じていない人、支援を拒む人、ということについては、上から目線な言い方だねと地域のシニアの方々と話すと出てくる。支援を必要としない、支援を拒む人に対しては、もしかしたら弱者と位置づけ、ある意味プライドを傷つけているということ、我々は押しつけているという視点も持ちながら、有用感とか役割とか、そういったものを日々のつながりの中から見つけ出し、そこから支援に結びつけていくというアプローチも

必要なのではないだろうか。

委員

8期の計画について、今までの計画と違う切り口でつくるといのがとても大事で、そのことを皆さん方はお話しされたのかなと思う。第7期ではなごみの家があり、住民も含めた計画づくりにシフトしたが、今回は更に住民も含めた計画づくりということになってきている。そういう点では地域の人たちをどう巻き込むかというのは、今までも既に行われており、人材は結構育ってきていると思う。そういう意味で、成果は十分ではないかもしれないが、なごみの家をつくったことは大事であり、しかも様々な経験になってきていると思う。

今後、皆様からも出ていたように、縦割りをどのように壊していくのか、仕組みをどうつくるか、人材をどうやって育てるか、これらが大きな課題となっている。既にいろいろな地域で取組をやっている方がたくさんいるため、区として今までの蓄積をプラスして育てていくという仕組みを、ぜひこの計画に盛り込んでいったらいいのかと思う。そして次世代に伝えていく仕組みをつくっていく。今活躍している人の次の世代を育てないと、多分なごみの家はうまくいかないのではないだろうか。介護保険、それから高齢者の計画だが、障害者と児童の計画との調整、また、区には地域福祉計画があるため、こちらも含めて調整し、形にできる人材を育てていくことが課題である。

委員長

私は、各団体の代表として来ていただくからには、全員の意見を伺いたいと考えている。次回のスケジュールでは、各論に入っていくので、そういった意味でも本当に今回の皆さんの意見は貴重なものになった。我々医師会は、先ほど健康部から話があったように、健康予防、予防接種などの仕事、そして医療従事者は健康に携わり、介護は介護事業者というように、まずそれが一つ重要なのかと思う。そして地域の関係者との密接化を持って対応し、区民一人一人が取り残されないよう支援していくことが非常に重要である。多種多様化しているのが現状であるため、一人一人を大事に見ながら支援していくという姿勢を持つことが重要だと思う。

6. その他

委員長 次回の開催日程について事務局お願いする。

事務局 第2回の開催予定案内

日 時：8月21日（金）午後7時から

場 所：タワーホール船堀

7. 閉会